

伝々夢詩

No.3

2013/09/10

愛西学園・愛知黎明教育研究所通信

発行責任

佐藤廣和

先日の豪雨の時は生徒の帰宅手配、本当にお疲れ様でした。

愛西学園に勤め始めて一学期が過ぎました。1学期は公開授業でいろいろな授業を参観させていただきました。私にとっては「看護」の授業は初めてなのでとても印象深いものでした。授業に触発されてこのところ看護の入門書を何冊か読んでいます。

読んでみると、私が今まで研究してきた「教育学・生活指導論」と多くの共通点を発見して感動しています。

この母が子を見る目こそ人間を見る目の基本とも言えると思います。

しかし、感情移入が過ぎてありのまま見る目を曇らせることもあるので要注意ではありません。それ故に看護師には、この母の見方のうえに諸科学の知識を基盤にした客観的な見方が要求されますが、そのことが強調され過ぎると冷たい目になりがちなこと戒める必要があります。とくに、科学的な見方をしようとして一人の人間を分断することはよくありません。頭のとっぺんからつま先までの部分を寄せ集めても全体像にはなり得ないのです。しかしながら、そうした部分のチェックをすることが、精密な観察であると思ひ込む傾向もあります。そうした見方をしないためにも、まるごと相手を受け入れて理解する方法を訓練しなければならないといつも思います。観察する者の価値観を交えずに相手の言動を観察するのです。

(川嶋みどり『看護の力』岩波新書 2012年 pp.36-37)

大正期に「生活指導」という言葉が在野の教師・研究者によって産まれた時、一番問題になったのが「子どものとらえ方」でした。

「ぼくが、ぼくのおとうちゃんが、ぼくに、ぼくにボールをかってくれました。」

このつたない小学校1年生の子どもの文章から子どもの「生活の波動」を読み取ることなく、「正しい日本語」という観点から訂正の赤ペンを入れる教師からの転換です。川嶋先生の「まるごと相手を受け入れて理解する方法を訓練しなければならない」という言葉に、看護と教育という異なる立場にありながら、同じく人間に関わる仕事としての姿勢を再確認しました。

さらに、学生時代に読んだ『満さんの教育学』の著者、三上満先生が中学校を退職後東葛看護専門学校校長をされていたことも初めて知りました。第1図書室で見つけた三上先生の本のなかにこんな一節がありました。

「学生が主人公」のいちばんの中心内容は、学生を”学び”の主人公にし、自主的主体的な学びの場をつくり出すということだ。そのためにGW(グループワーク)という時間がふんだんにある。新入生たちは時間表のGWの文字を見て、ゴールデンウィークかと思って喜ぶ。これが高校時代そういう経験を持たなかった新入生にはかなりきつい時間となる。なぜみんなで学び合わなければならないのか。一人で勉強した方がよっぽど能率があがるのに…。質問しようと思っても「こんなこともわからないの」と言われそうでこわい。わからないみじめな自分をさらけ出せない。こんな辛さや戸惑いを味わいながら、学生たちは「学びを重ね合う」ことの”すごさ”にしだいに気がついていく。異なる理解や違う見方がある場合、それはいずれが正か誤かで割り切れるものではなく、みんな少しずつ正しく少しずつまちがっている(不十分である)ことなのだとわかっていく。仲間からもらう”気づき”も嬉しい。GWはしだいにほんと実りの

学びの場になっていく。(三上満・小林功フォトドキュメント『患者さんの笑顔が見たい 看護学生の日々』2007年 かもがわ出版 49頁 下線佐藤)

本校でもGWを授業に取り入れることがすすめられています。GWには多様な形態(目的や方法)があるので、今後の研修会で深められたらと思います。

<全国研究会のご案内>地域民主教育全国交流研究会・福島集会(10月12~14日)

10月12日 過酷な現実をつかむための現地訪問:AとBは福島駅13時、Cは仙台駅12時集合

Aコース:飯館村関係(飯館村で現地の方から聞き取り)

Bコース:福島市&二本松関係(さくら保育園、浪江小が避難している二本松)

Cコース:宮城県閑上地区(名取市)(南相馬市鹿島小、小高地区)

夜は交流研名物・地酒持ち寄り大交流会

10月13日 福島市民会館

午前 鈴木康裕(福島大)「スクールソーシャルワーカーから見る福島の子どもたち」

午後 分科会①子ども②学習③教師・学校④地域

10月14日 福島テルサ

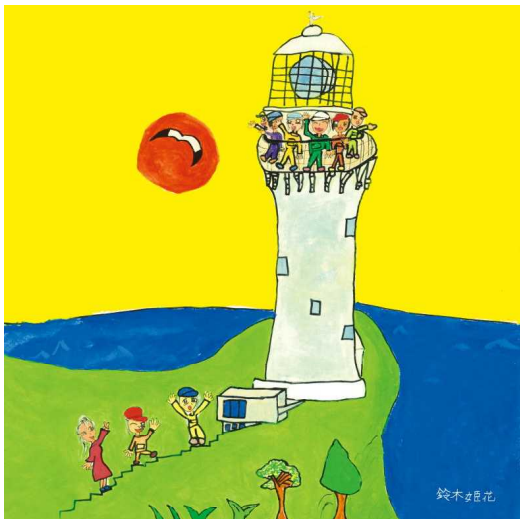
午前 分科会2日目

ー 昨年の岐阜県恵那集会では本校の学校づくりフォーラムが第3分科会で報告されました。今年は福島の全面的な協力で現地訪問を入れた研究会になっています。各コースには定員(約20名)があるので、申し込みは早めに! 詳細な集会要項は佐藤が持っています。

<地域研究会のご案内>三重フレネ研究会 10月19日(土)午後3時半~6時 三重大

ほぼ毎月、三重大教育学部(津市)を会場にこじんまりと30年間開催されています。子どもを主人公にした学校づくり、個人学習と共同学習を調和させた学習改革を1930年代から展開しているフレネ教育を、日本の自分の現場で発展させる研究会です。参加費無料

<片田敏孝先生の防災授業>9月28日の学園祭に来校される片田先生が和歌山県田辺市の防災教育に取り組む様子が先日放映されていました。”釜石の奇跡”でよく知られる片田先生は、釜石市の中学生達が<守られる人から、守る人へ>意識を転換し、リヤカーでお年寄りや身体が不自由な方を避難させる訓練に取り組んでいることを高く評価しています。しかし、ご自身が八戸で3.11に遭遇された時、未曾有の地震に中学生達が<守る人>という意識に囚われて



て自分自身の命を守れているか心配だったという思い出を、苦悩に満ちた表情で(私にはそう見えた)で田辺の中学生に語ってみえました。本当に難しい<選択>についての話を中学生達は真剣に聴き入っていました。片田先生の、釜石に深く関わってきたから湧き出した思いに、「自分がその場にいたら?」ということを考えざるをえませんでした。

研究所には3・11関係のDVDや文献があります。ご活用ください。